

代々木病院の理念

ヒューマニズムにもと
づく医療・介護の実践

くらしと健康

発行 医療法人財団 東京勤労者医療会 1部60円
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷1-30-7
TEL (3404) 7661
E-mail address yo_sosiki@tokyo-kinikai.com
友の会会員は会費に購読料がふくまれています。



五日市医長（左から2人目）とカンファレンス

5階病棟で緩和 ケアのとりくみ

“笑顔で最期”を 迎えられるよう

緩和ケアは、「死ぬまでより快適に生きることを選択した」患者さんのために、不快な症状をできるだけ取り除き、最後までその人らしく生きることを応援する医療活動です。五日市宏医長のもと、がん患者さんの終末期における緩和ケア活動を推進している代々木病院5階病棟の高橋麻弥子看護主任に話してもらいました。

私たちの病棟は消化器外科、一般内科の混合病棟です。その中で手術を受ける患者さんは消化器がんの患者さんが多く、その後も闘病生活を送る患者さんが多くいます。中には終末期として当病棟に入院される患者さんもいて、強い痛みや、吐き気等さまざまな症状を訴えながら亡くなる方が多く、悲しい看取りをしてこざるを得ませんでした。

私たちは、医師をはじめ全職種が協力して、どのがん終末期の患者さんも笑顔で臨終を迎えることのできるケアをしたいと緩和ケア病棟をもつ民医連東

神戸病院の医師を講師に招いて学習するなど、の努力を重ねてきました。

2007年、五日市

〇さんのご遺 族からの手紙

母は、告知を受けてもなお希望を捨てず、前向きで、9月の入院前日まで自力で歩き、父と二人、二人三脚で生活しておりましたので、入院して一番辛かったのは、昨日まではできていた立つことさえ今日はできなくなること、上手につき合っていたつむりの痛みや吐き気が一転、自分ではどうにもならなくなってしまうこと

宏医師が民医連北海道勤医協中央病院で研修する際、ぜひ緩和ケアの吸収もしてきてとの期待も込めて送り出し、08年に帰任した五日市医長を中心に関係各職種にも参加してもらって学習と実践を重ねました。そして秋に行われた勤医会千駄ヶ谷ブロックの看護・介護活動交流集会で〇さん(女性 68歳 胃癌 脳転移 転移性骨腫瘍 腹部大動脈リンパ転移)の事例を発表させていただきました。

さらに力量アップをめざします

私たちは、代々木病院の会会員60人が、JR

〇さんは2007年11月、胃癌(stage IV)と診断、告知され、外来通院で化学療法を受けておられました。08



浦田駅前医師・看護師・介護士ふやせの訴えも

手術台

書店にチェ・ゲバラ関係の本が溢れている。映画化に便乗しての出版、増刷と

言われている。別の見方もある。彼はなぜ今も世界中の人から愛され慕われているのだろうか▼ゲバラは喘息と闘いながら戦い続ける。キューバ革命に飽きたらず、ボリビアから南アメリカ全体に革命を起こそうとしたのは冒険主義者であろう。なのに「格好いい」と圧倒的な人気だ。ルックスだけではあるまい。それは私たちがやろうとしてできない「理想を追い続け」「初志を曲げず」「妥協しない」からである。これは今を生きる我々の対極にある。それだけに人々の「憧れ」「夢」になる。もうひとつの理由はボロが出ないうち、桜が真っ盛りのときボキッと折れたからである。死者は決して誤りを犯さない。英雄として生き続ける。ギリシャ救国の英雄ランプラキス、若くして凶弾に斃れたジョン・レノンにも同じことが言える▼ゲバラは広島で原爆資料館を見た後「これだけやられてなぜ仕返ししないのだ!」といったという。(ま)